

ESPRIT

剣道専門分科会 会長挨拶

大保木 輝雄

平成26年度 日本武道学会剣道専門分科会研究会

「外国人武道家が捉える剣道の競技としての特性と

日本文化としての特性」

ニュージーランド剣道連盟会長 グレアム・セイヤー

The16thWKC 日本武道学会剣道専門分科会企画

「剣道具を通して日本文化を知る」

“Exploring Japanese Culture through Kendo Equipment”

第1部 DVD上映 「剣道具にみる職人の技と心」

第2部 ワークショップ 「本物の剣道具を感じてみよう」

東京正武堂 剣道具師

講師 鉄川 榮市・井上大久・齋藤一貴

会計報告

事務局便り

目次

会長挨拶 大保木 輝雄	・・・ 1
平成26年度日本武道学会剣道専門分科会研究会 「外国人武道家が捉える剣道の競技としての特性と日本文化としての特性」 グレアム・セイヤー氏（ニュージーランド剣道連盟会長）	・・・ 2
The16thWKC日本武道学会剣道専門分科会企画 「剣道具を通して日本文化を知る」 " Exploring Japanese Culture through Kendo Equipment " □ 第1部 DVD上映「剣道具にみる職人の技と心」 □ 第2部 ワークショップ「本物の剣道具を感じてみよう」 講師：鉄川榮市（東京正武堂・剣道具師） 井上大久・齋藤一貴（アシスタント、同）	・・・ 14
剣道具豆知識	・・・ 20
事業報告・事業計画	・・・ ××
決算報告	・・・ ××
会則の改正について・事務局便り	・・・ ××

挨拶

剣道専門分科会 会長 大保木 輝雄

16thWKC期間中の行事の一つとして5月27日に本分科会企画“剣道具を通して日本文化を知る”が国立オリンピック記念青少年総合センターで、午前中の2時間にわたり実施された。とにかかくにもこの企画が成功裏に幕が閉じられたことに対し、関係諸氏の秘めた企画力・機動力に敬意を表したい。特に、DVD「剣道具にみる職人の技と心」（文部省科学研究費助成事業成果）の提供に加え、不確定要素の多い中で状況を見ながら本企画の実行に向けて着々と進行された酒井事務局長、それにワークショップ実行に協力いただき、剣道具職人としての情熱を余すところなく披露していただいた鉄川榮一氏及び一門諸氏に対し、改めて謝意を表したい。

今回の成功の要因は、ひとえに各人が自分の立場で互いに“間”をとりながら進行してきたことに尽きると考えています。自分の立場をわきまえつつ相手の立場を慮る、つまり「機」を見て実行に移す。これが組織力の向上に繋がっていったのではないかと。剣道を学ぶ眼目は、剣道形は言うに及ばず、「一本」の成就においても「機」を見ることができると考えれば、この成果は会員諸氏の剣道の修練の賜物だったともいえるだろう。本分科会は、かように元々ポテンシャルの高い組織なのである。

今回の行事を終えて感じた会員諸氏の阿吽の呼吸のようなものに触れ、武道の抱えている問題は二つあることを確認した。個人技としての修練と集団における個の在り方の修練である。

ここで、この両者を結ぶ「き」（起、機、気）という言葉に焦点を当ててしばし剣道の思想に触れてみたい。

剣道の特性は「気剣体一致」と端的に示されている。しからば、そこに示されている「気」とは何か。それは、ある対象に対し自分の身体の内的統一を担保しつつ対外能動性を最高に発揮させる、つまり「心と体の間」をつなぐ「今・ここ」に在る自分の心の状態だと認識できるのではないかと。ありていにいえば大いに「溜め」大いに「捨てる」ことである。しかし実際は、お互いに対峙し、時空間の圧力が高くなればなるほど体の筋肉は緊張して「溜め」が少なくなり、対外的エネルギーは小さくなるものだ。ここで、もし逆に相手からの強烈なエネルギーが体の筋肉の弛緩を促す契機となるならば「溜め」は大きくなり対外的能動性が高まることになる。この工夫が必要である。一方、「何時捨てるのか」が問題となる。これを剣道では「機を見る」と表現している。現代剣道では「出るところ、引くところ、居着いたところ」が打突の機会として示されていることも周知のことである。

「気」の観点から剣道という文化を眺めると、身心の内的統一性と対外的能動性は「充実した氣勢と適正な姿勢」というポテンシャルエネルギーを練り上げる工夫に加えて、そのエネルギー発揮のための「機会」を感得する別の工夫が折り込められている、とみることができ。剣道の高段者は体験知として既にこのことを認識して

いる。しかし、この体験知が日常生活の諸々に行動原理として活用されているかどうかの確認は未知数である。この点においては、今回のように同一課題に対し組織として取り組む時、その結果が具体的に現れてくるのではないかと考えている。

では、個人技としての「機会」を捉える工夫と、集団を動かすための「機会」の捉え方を同一視する方法は「何時、誰」によってなされたのか。これは、私が16thWKCへの取り組みを契機として再認識した新たな課題である。

「機を見る心」養成を中心課題としたのは、柳生宗矩（1571-1646）の『兵法家伝書』。その成立の背景には「兵」の剣術と「将」の剣術の融合を果たした柳生新陰流と徳川家康(1542-1616)の双方の「意志」がある。

期せずして、今年が家康没後400年。その「意志」は今日も剣道の底流に脈々と流れているのではないかと。そのような思いは日々深まるばかりである。

16thWKCの体験は来る50周年記念行事に向けてさらに強化されることであろう。会員諸氏の叡智が結集され広く世界に発信されることを切に願う。

平成26年度日本武道学会剣道専門分科会研究会

外国人武道家が捉える 剣道の競技としての特性と日本文化としての特性

日時：平成27年3月14日（土）15:00～17:00
会場：講道館 2階教室
講師：グレアム・セイヤー氏（ニュージーランド剣道連盟会長）
司会：齋藤 実（専修大学）

司会（齋藤）：今日は年度末のお忙しいところ、研究会にお集まりいただき、有り難うございました。本日、司会を務めさせていただきます、専修大学の齋藤です。宜しくお願ひ致します。まず、はじめに大保木会長からご挨拶を頂きたいと思ひます。宜しくお願ひ致します。

大保木（剣道専門分科会会長）：皆さんこんにちは。今日はお忙しいところをお集まりいただきまして本当に有り難うございました。数年前、武道学会のシンポジウムにおいてベネット先生が固有性についてお話をされました。剣道には固有性があるけれども、それが



普遍性を持つかどうかを考えなければいけない、というような話がありまして、それから数年経ち現在に至るわけです。また、今年は5月29日から31日にかけて、世界選手権が25年ぶりに日本武道館で行われます。私たちは今、岐路に立っていると思ひます。それは教育の世界もそうですが、国際化したグローバルな世界の中で剣道がどのように貢献できるのかということも含めて、私たちはそれをするのがどういう事なのかを考えなければなりません。また、刀をもって生死を懸けた戦いをやってきた、日本という国で生まれた剣道の問題が、何かしらグローバルな世界の中で解明できるかもしれない、ということをご皆さん強く感じておられるかと思ひます。今日はグレアム・セイヤー先生にお忙しいところを快くお受けくださりまして、本当に有り難うございます。先生が感じておられるところを遺憾無く私たちに話いただければ幸いに存じます。宜しくお願ひ致します。

司会：本日のタイトルは、「外国人武道家が捉える剣道の競技としての特性と日本文化としての特性」

ということでグレアム・セイヤー先生をお呼びしています。先生について少しご紹介させて頂きたいと思ひます。

先生は、1979年に剣道をはじめられ、現在、剣道錬士六段（講演当時。現在は錬士七段）です。1977年から1986年まで日本に在住され、今も静岡県にお住まいです。ニュージーランド剣道連盟の発足では、中心的な役割を果たされ、第7回（1988）、第10回（2000）、第11回（2003）、第12回（2006）の世界剣道選手権大会のニュージーランド代表としてご活躍されました。現在はニュージーランド剣道連盟会長、国際剣道連盟の監事も務められており、先日の世界大会の抽選会にも参加されたと伺っております。地元でもローカルな高校生の大会等でも審判をなされるなど、剣道に携わっていらっしゃる先生でございます。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

先ほど、大保木会長の方からのご案内がありましたが、今、日本においてはスポーツに関してムーブメントが起っているのではないかと思ひます。ご存知の通り平成



23年にはスポーツ基本法が制定されました。これは40年ぶりの改訂になります。そして、本年10月には文部科学省の外局としてスポーツ庁が設置されることになったというのはご存じの通りかと思えます。このスポーツ基本法の冒頭は、「スポーツは世界共通の人類文化である」と、グローバルな視点での見方から書かれており、この点が特徴的かと思えます。そのような中、平成24年度からは学習指導要領の改訂によって、中学校3年生保健体育の体育理論の中で、オリンピックや他の国際スポーツ大会などが国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていることも学習するようになりました。つまり、これからの日本のスポーツは日本的なスポーツの捉え方をさらに超え、オリンピックをはじめとする国際競技大会を通して、スポーツを世界の文化として捉えていく方向に明確に舵をきっていると見えるかと思えます。その一方で、武道必修化が平成24年に完全実施となりました。剣道はそのような位置づけで、今、教育界

で捉えられていると思います。そして、2020年には東京でオリンピック・パラリンピック大会が開催されることが決まっており、日本のスポーツ環境が大きく変わろうとしている、これが現状かと思えます。

こういった状況下にある剣道ですが、海外においてはどのように捉えられているのか、ということも私たちは知っておく必要があると思います。そこで本日の研究会では、このテーマについて、今ご紹介させていただきましたグレアム先生をお招きし、海外からの視点で剣道についてお話いただければと思います。それでは先生、宜しくお願い致します。

グレアム・セイヤー（ニュージーランド剣道連盟会長）：皆さんこんにちは。宜しくお願い致します。齋藤先生、素晴らしい紹介をいただき、本当に有り難うございます。少しだけ私自身の剣道の経歴についてお話ししたいと思います。私は13歳から柔道をやっていました。当時、ニュージーランドには剣道がほとんど普及していませんでした。20歳のとき、柔道が目的で来日しましたが、途中でひどい怪我をしまして、寝技ができなくなりました。その時、柔道の先生が、「グレアムは動きが硬いからリハビリに竹刀を使い」とおっしゃいました。その時代はウェイトトレーニングなどをよく行っていたのですが、その時まで竹刀というものが何か全然わからなかったのです。これがスタートでした。

その後、2年間、柔道と剣道を両方稽古するうちに剣道の回数が増えていきました。そして、剣道のみを稽古するようになり、三十数年間剣道をやっております。

ひと月半ほど前、この研究会の依頼を頂いたときに、他の国のデータも集めたほうが良いのではないかと思ひまして、ニュージーランドを含め4カ国に簡単なアンケートを送り、調査しました。オリンピックについての質問、プロモーションについての質問、自分の国ではどのような問題があるか、これらの点について聞きました。アンケートの答えについては後ほど紹介します。

今日は最初に、南半球の一番下の方の小さな国であるニュージーランドが、なぜ世界大会（第15回イタリア大会）でベスト8（男子団体）に入ることができたのかについてお話ししていきたいと思ひます。今、ニュージーランド国内には14箇所剣道の道場がありますが、そのうちの2箇所は剣道のためだけに建てられた道場です。平均的に最近10年間の剣道人口が200人しかいないにも関わらずに、です。このあたりのことについて少しお話ししたいと思います。

皆さんご存知かと思ひますが、ニュージーランドの国の面積は北海道を除いた日本と同じくらいです。島国で、位置的には南半球の下の方です。また、オーストラリア以外、近くで剣道をしている国がありません。人口は420万人です。今年の1月の段階で、剣道人口は249人で、道場が14箇所あり

ます。連盟に加入した道場を開くには条件があって、三段以上の指導者がいなければ、道場を開くことができません。必ず場所が確保されており、三段以上の指導者が永住ビザを持っていないと許可されません。14箇所のうち、12箇所のみが剣道連盟に加入しています。あとの2つはサテライト道場というような感じで、三段以上の指導者が、小さい道場に指導に行くというような状況です。世界中の剣道をする女性のリサーチペーパーの結果の中で、ニュージーランドの剣道人口について少し面白い数字が出ています。日本も含めて、世界中で剣道をする女性の割合は全体のうち22パーセントです。ニュージーランドでは28%と高い傾向にあります。更に面白いのが、250人のうち50人くらいはジュニア（16歳以下）で、その半分は女性です。ですから、将来はもっと面白くなると思います。次にオークランド剣道クラブについて説明します。1993年から2008年までのメンバー数が30人から40人で、一番高段者のグループとして五段のグループがありました。1993年の頃は、小さいクラブでしたので、メンバーのトップの人たちが勇気を持って街の中心から10分くらいの距離にある場所を借りました。ニュージーランドで場所を借りる時には、リースにサインをしないとイケません。さらに保証人が必要です。この時は20名ほどサインをしました。借りたのは小さい工場でした。そして、皆の協力で少しずつ内装を作りま

した。道場開きの時には、日本の領事館に依頼し、来ていただきました。

2つ目に説明させていただく道場は青稲剣友会です。これはクライストチャーチにあります。この道場もただの工場が皆の協力で素晴らしい床の道場になりました。皆さんご存知かと思いますが、2011年、クライストチャーチを地震が襲い、空手や合気道と一緒に使用していた道場が壊れてしまいました。その後1年間くらいは稽古する場所がなかったため、毎週稽古をする場所が変わりました。こちらもある人に投資してもらい、工場を買ってもらいました。その後、どのように立て直したかが素晴らしいところです。これについてはあとで説明します。

オークランド剣道クラブに話を戻します。2008年、オークランド剣道クラブは街の中心の道場の近くにある建物の持ち主が急に病気になるられて、売らなければならなくなりました。当時、メンバーが40人から50人程いたのですが、どうしようかということになって、

20年の所有権があったため、残りの8年か9年の権利の代わりに約300万円のお金をもらったのです。そのお金を道場の床に充てました。その後、試合場が2つ入る広さのキャンピングカーの製造工場だった場所を見つけました。内装は自分たちで作りました。そして道場を新しくこの場所に移動させました。ここがオークランド剣道クラブの本部になるわけですが、現在はよく全国規模のセミナーに使っています。去年の2月、静岡から5、6人の先生方がいらっしやって、ベネット先生にも来ていただきました。今年もまた、この間の2月に開催したばかりです。オークランド剣道クラブのためだけではなく、全国の剣道のために行いました。

私が考えていることですが、ニュージーランドはパイオニア・スピリットがあります。これは私たちのDNAに入っています。ニュージーランドはとても若い国です。白人の歴史が200年もないのです。原住民の人たちについてもいろいろな方が研究されていま



すが、実際いつ、どこから来たのか、はっきりわかっていません。それでも300年です。

まず、「ワーキング・ビー」、これが大切です。蜂の巣があつて、クイーン・ビーがいて、というようなイメージでしょうか。ニュージーランド人でないとわからない言葉だと思います。ワーキング・ビーのメンタリティーが私たちの身体の中に染み付いています。これはニュージーランドのチャリティーのやり方です。

もう一つは「スウェット・エクイティー」。これは辞書で調べても、カタカナでしか出てこない言葉だと思います。なぜならスウェット・エクイティーは大体ビジネスの時に使う言葉だからです。日本では十数年前から使い始めた言葉だと思います。スウェットは汗、エクイティーは所有権です。汗の代わりに所有権をもらうということです。あとで詳しく説明しますが、私たちはチャリティーの時によく使います。先に紹介した道場のように建築のプロジェクトであれば、普通は建築のプロジェクトリーダー、あるいはボスが必要です。しかし、ニュージーランドの場合はみな、無料でやってもらうので、ボスがいたら非常にやりにくいのです。プロジェクトを行うときは、監督がいて、トップダウンというやり方が普通ですが、ニュージーランドでチャリティーのために何かやろうと思ったら、リーダーが真ん中に立って外に発信しなければならない。上からプレッシャーをかけると、皆来ない

のです。皆、無償で来ていますから。

皆さん、頭ではご理解いただけたと思うのですが、「資金はどこから？」と疑問に思うのではないのでしょうか。それを今から説明します。ニュージーランドのファン・レイジング、資金の集め方です。単に寄付してくださいという依頼ではなくて、皆ワーキング・ビーのメンタリティーでこれをやります。実は今年の1月にもクライストチャーチで実施して、資金を集めました。まず、1つ目は“Cut-a-thon”です。剣道の素振りの一振り、二振りをcutと言います。それに、“Marathon”の“thon”を合わせて、Cut-a-thonです。素振り一振りに対してお金を払ってもらうということです。まず、メディアに「われわれは、街の真ん中の公園で一万回素振りを行うから見に来てください」と言います。そこで子供たちやメディアのメンバーにこのような紙を渡します。そして、親や親戚に渡してもらうようにし、一振り1円くださいと言います。このように考えると、1万回は100ドルになりますね。1人のメンバーが頑張つてスポンサーを50人、60人も集めます。特に子どもだと集まりやすいです。しかし、汗をかいて、パッションを渡して、スポンサーシップはもらわない。だからCut-a-thonは非常に面白いと思います。もう1つの方法はマラソンです。フルマラソンではなく、15kmほどです。十数年前、同じ要領で、「1km走ったらいくら資金を出

してくれますか？頑張つて剣道具を全部着けて10km走りますよ？」こんなことを言ったら2、3ドル出してくれました。50人、60人のメンバーがいれば、かなり資金は集まります。

こういったことをするのは、お金を集め、道場の材料を買うという目的があるからですが、それだけではありません。出来るだけコミュニティに対して色々なことをやりたいのです。少し悲しい話ですが、うちのメンバーの子供が8歳の時、癌で亡くなりました。その時、メディアを集めて、道場で1万回のCut-a-thonをやり、8000ドルほど集めました。そして、そのお金は全て小児がんの研究所に寄付しました。結果、このような感謝状をいただき、今も道場に残っています。とても良い宣伝になります。メンバーの中に子供がいますが、1万回なんて、8歳や9歳の子供には無理です。だから、スポンサーシップペーパーで私は200回頑張ります、などと書いて、いろんなところに配るわけです。ですから、Cut-a-thonの素振りの数には上下があります。そして、上手くやれば、素晴らしい道場が出来るわけです。オークランド剣道クラブのテーマは、“1dojyo, 1family, 1mission”です。道場というのは家族とコミュニティに入つてこない、例えば、時間が取れないだとか、うちのお父さんはいつも道場にいる、とか苦勞することばかりです。

ベスト8（第15回大会）に入ることができた最後のポイントにつ

いてお話しします。先ほどお話しさせていたワーキング・ビーのメンタリティーを持っている人が剣道関係者には多い気がします。一人そういう人間がいたら、試合の時、それがチームに移ってしまうのです。結果はあまり良くありませんが、1985年から毎回世界選手権に行っています。2009年にコーチが変わりました。それでも、チーム・エフェクトということを考え、まず、真ん中に立って、ときどき上から厳しくものを言わないとダメだと思います。尊敬されないと前に進めない。5月に行われる今回の世界大会では再びベスト8に入りたいと考えています（結果は、男子団体でベスト16）。

それでは、次に世界各国に出した剣道に関する質問の答えを見てみたいと思います。剣道に関する質問を4カ国に出しました。この4カ国を選んだ理由ですが、まず、ニュージーランド、これは私が会長で詳しい情報を得られるからです。次に中国ですが、現在の中国剣道連盟の会長が、今から11～12年前、学生だった頃にニュージーランドに来て、4年ほど居ました。そういうわけで彼は非常にニュージーランドファンです。彼が中国に帰ってから中国の剣道人口が1,200人から12,000人になりました。もちろん彼の力だけではありませんが、これはすごいことです。私は彼には何でも聞けますので、質問の回答をお願いしました。ニュージーランドの一番近くのオーストラリアの会長にも質問を出しました。そして最後に、世

界的にニュージーランドに似ているところはどこだろうかということを考え、南アフリカを選びました。ニュージーランドと一緒に剣道が盛んな国から遠いのです。南アフリカの副会長の方に聞きましたが、質の高い剣道の稽古をしたかったら、最低でも飛行機で10時間かかります。

これらの国にはどのような問題があるのでしょうか。当然お金がありません。もう一つはメンバーのプロモーションをどの国もやります。ニュージーランドもどんどん募集したいという気持ちがあります。この2つの問題はどの国も同様ですので、今回は他の質問を聞きました。

まず、「この他の問題はなんですか」という質問です。はじめに、ニュージーランドからです。ニュージーランドにはニュージーランドの剣道のやり方があります。剣道のテクニックの話ではありません。先に説明した、ニュージーランドの文化から生まれてきたやり方です。ニュージーランドには日本か

らだけでなく、イギリスや韓国など色々な国から人が来ます。オークランドの剣道クラブのメンバーは8カ国の人間から構成されています。例えば、日本の先輩・後輩のシステムをそのまま日本から持って行き道場をはじめたとします。道場の中では良いのです。しかし、その先輩・後輩のシステムを道場の外の生活に持っていくと困ります。そこがニュージーランド剣道連盟における問題の一因です。かなり苦労します。このようなときには、私やベネット先生のような橋渡し役をすることが出来る人間が必要です。韓国の場合は、韓国で生まれ、2歳の時にニュージーランドに来て育った20代の子が橋渡し役を務めています。中国人もニュージーランドに住む方が増えたため、橋渡し役が必要です。日本もこれから色々な国の外国人が観光だけではなく、仕事のためなどで来日することが増えると思います。ですから橋渡し役が必要です。



中国にはどんな問題があるかという、剣道人口が10年で10倍になったということで、知らない間に道場ができてしまいます。商売になるから、初段を取得したら皆、道場を開きます。このことがお金の問題で喧嘩する原因になります。これが中国剣道連盟の会長が懸念している一番の問題です。

南アフリカは剣道人口が180人しかいません。六段が2人います。また、遠いので日本からなかなか先生方が行きません。しかし、この問題よりも、木の床のスペースが少ないことが問題です。そして、サッカーやラグビーなど屋外のスポーツに人が流れてしまいます。ジムを造るときは会員制の高級なジムしか造りません。学校はコンクリートの床にしてしまうため、借りる場所が少ないのです。

オーストラリアはカナダやアメリカと同様、国が広いという問題があります。例えばシドニーで何かやろうと思ったら、パースよりも、ニュージーランドの方が近いのです。ですから、オーストラリアで集まろうと思ったら大変なことです。これがオーストラリアの会長が最も懸念している問題点です。

次に「剣道はオリンピック競技になると思うか」という質問です。

南アフリカの答えには、「柔道を見なさい」ということが書いてありました。どんなことがあっても勝たなければならないという勝利至上主義の状態になると、伝統性や歴史がないがしろにされるの

ではないかと心配をしているようです。南アフリカ剣道連盟の副会長に「剣道がオリンピックに入るなんて聞いたことがない」と言われたことがあります。しかし、彼はよくヨーロッパにも行っていますから、「30年、50年先の話ですが、いずれはオリンピック種目になるかもしれない」ということは言っていました。いずれにせよ、伝統や歴史をないがしろにすることがないように、考えながらやってほしいと思います。

中国に聞いたら非常に長い答えが返ってきました。簡潔に言うと、会長は「個人的にはオリンピック種目に入ってもらいたくない」ということでした。現在、オリンピックの中にはボクシングやテコンドー、フェンシングなど、コンバット・スポーツがいっぱいあります。ですから、何故そこにもう1つ必要なのかということだと思います。また、中国の場合はオリンピック種目に入ると政府から資金が入ってきます。これは試合に勝つための資金であり、子供を育てるためとか、道場のコミュニティーのためとか、そういった用途の資金ではありません。この会長は言いませんでしたが、剣道がオリンピックに入ってしまうことで、剣道の傘下に入っている居合道、杖道、国によっては入っているなぎなたなどにお金がほとんど入らなくなってしまう可能性があります。

次にオーストラリアです。やはりNOです。伝統性が薄れるのではないかという心配からです。個人的な意見ですけれども、この意

見は、オーストラリアの代表的な意見だと思います。

最後にニュージーランドです。私は初めて出場した1988年の韓国での世界大会のときに既に会長でしたが、はじめて韓国から「オリンピックに入ったほうがいいのではないか」という話を聞いたのです。その年は偶然ソウル・オリンピックがあったのです。世界選手権は5月、オリンピックは8月でした。これは大分昔のことですから、この話はあまり大きくなっていないかと思っていたのです。しかし、今回、齋藤先生から講演の話をいただいて、その質問について話をするように言われた時、逆に日本はどうかと聞きたいと思いました。まず、日本の剣道界はどう思っているのか聞いたほうがいいと思います。なぜなら、剣道のルーツは日本ですから。自分たちの大好きな剣道がオリンピックに入ることにどう思うのかを考えるべきだと思います。

剣道の人口を増やすことについては、中国以外はどの国も結構苦労しているようです。国によっては減っているところもあります。人口を増やすために良いアイデアはないかと4つの国に聞きました

オーストラリアからは、大会・講習会を行う際に必ず良い大学・良い場所で行う、という答えが返ってきました。大きい大学の体育館などを借りて行くと、他のスポーツをしている大学生が見に来たりするわけです。そして宣伝するのです。だから、どこの町で開催す

るにしても、一番良い体育館を選んでるようです。

中国の場合は、剣道人口の増減に関するレポートが毎週のように色々な道場から会長の元に入るそうです。中国ではテレビアニメが放映されるとプロモーションになります。もし、日本のテレビアニメが放映されてその中に侍が登場すると、次の週はメンバーが増えるのです。また、ソーシャルメディアの力はすごいです。Facebookなど、ソーシャルメディアで皆つながっており、そこで募集したら入ってくるというわけです。

南アフリカはこの中で一番面白いアイデアを持っていると思います。皆さんグループンをご存知でしょうか。グループンでは宿泊所などがお客さんを引っ張りたい、つまり、リピーターを作りたいときに使われます。70パーセントオフの高級ホテルもあります。短い間で予約をとって、70パーセントオフの高級なホテルに宿泊に行くわけです。うちもよく使いますが、リピートはしないので、ビジ

ネスにはならないと思います。しかし、剣道は良いです。なぜならビジネスコースなどを作り、3週間100ドル、4週間または1カ月200ドルというような感じで、値段を適当にとって長い間泊まってもらうのです。このグループンという会社が5~10パーセントのコミッションをとるのですが、南アフリカの場合は最低20人、多いときは50人集まります。利用者のほとんどは家族がプレゼントとしてグループンを買っているようです。「うちの息子に何もしてないなあ、70パーセントオフ！」ということで息子に買うのです。または、娘に、お父さんに。それなら行かないとだめだと思うわけです。そして行って剣道の稽古をする。そして、前払いだから先にお金をもらいます。でも次の時は来ないこともあります。南アフリカでは20人が始めるとだいたい5人くらいは残るそうです。2か月のコースで1週間に1回。お金は前払いだから20人分もらっていることになりましたが。残った5人は剣道具をつけ、稽古が厳しくなる

と、そのうち4人が辞めていってしまう。このグループンを使った方式で2年ほど勧誘をしているそうです。ニュージーランドもこれから使っていきたいと思います。

最後はニュージーランドの方法です。道場によってやり方は違いますけれども、うちの場合は「Free竹刀」です。初心者がスタートしたら、まず6週間のコースを行います。週2回のコースです。初めての稽古日に100ドルほど払って竹刀をもらうわけです。自分の竹刀を持つことになるので、南アフリカよりもう少し人が残ります。自分の竹刀を先に買うことで、もう少し頑張って続けよう、という人が多いのです。それでも、本当に残る人は非常に少ないです。

最後に私が言いたいことは、剣道は素晴らしいものだという事です。そのルーツは間違いなく日本です。しかし、それぞれの国にはそれぞれの文化・民族の性格があります。日本の剣道をそのまま普及することはできません。ですから、剣道が今後さらに普及するためには、その国の文化・やり方を考えながら普及していくことが必要だと思います。そして、次の世代でたくさんの橋渡し役の人間を育成することができれば、剣道の普及率は上がっていくと思います。次の世界選手権は56の国と地域です。すごいことです、私が初めて出たときは、1985年のパリ大会当時は27か国しかありませんでした。以上で終わります。有り難うございました。



司会：グレアム先生、有り難うございました。まだお時間があります。今、大変興味深いお話を伺いましたが、まだまだお聞きしたいことがあるかと思えます。フロアの先生方から質問をいただきたいと思えます。どなたかご質問がありましたら挙手をお願いいたします。

百鬼（日本武道学会会長）：大変興味深い話を有り難うございました。基本的には先生のご意見に賛成です。その国の文化や考え方がある程度尊重しながら、それに合った形で剣道を広めていくということが拡大につながるということですが、その国の方たちのキャラクターや気質を尊重しながらも、剣道そのものを変えるのではなくて、運営の仕方などを変えれば良いとお考えなのでしょうか。日本でも剣道を競技的に考える人と、いわゆる武道的に、日本人的なものの考え方などを中心に考える人で結構分かれていると思えます。そのあたりのことについて、「各国でそれぞれの文化に合うように」という意味をどのようにお考えなのかお聞かせ願えればと思います。

セイヤー：文化ということ自体が非常に難しいコンセプトだと思います。その中に宗教のことがありますが、ここでは避けます。私は、若い国であるニュージーランドにおいては、私たちの世代とは違う現在のニュージーランド人に沢山の質問をしなければいけないと思えます。今、国際結婚が増えていますから、ニュージーランド剣道連盟でも次の世代はハーフの子ど

もが非常に増えます。先ほど申し上げたように橋渡し役をする人が非常に重要だと思います。また、私たちの世代から考えると、剣道をはじめたきっかけが変わってきているように思えます。私はベネット先生と15歳しか違いませんが、私たちの世代は、柔道・合気道・空手など他の武道から移ってきた者がほとんどです。ベネット先生たちの世代は、日本の文化を知りたい、ジャパノロジーを学ぶために入ってきた者が多いように思えます。次の世代の者たちが、どうして剣道をはじめたのか、その理由を研究して、剣道自体は歴史が重要ですから変えるべきではないと思えますが、柔軟性をもって普及していくことが大切でしょう。剣道の世界で先輩・後輩システムは非常に大事です。うちの道場でも高段者が前に座るなど、そういうシステムはあります。しかし、そういったシステムを日常生活には持ち込みません。なぜなら、そのメンバーの家族はそのシステムを理解することができないからで

す。無理にやろうと思ったら失敗します。

ベネット（関西大学）：補足させていただきます。いわゆる人間関係というのは一番摩擦の原因になります。ニュージーランドのどの道場に行っても、やっていることは日本とほとんど変わりません。多くの場合は日本語の号令に従って稽古を行っています。当然その中には先生がいて、先輩・後輩の関係もあります。しかし、日本と違うのは、子供やティーンネイジャー、中年の人が一緒に稽古する機会が多いということです。人数が少なく、少年の部や高校生の部を作る余裕はありませんから、今のところ一緒に稽古しています。そういうところで日本とは雰囲気の違いがあります。また、ニュージーランドという国は平等主義で作られましたから、会長の言ったとおり、道場の外でそういった上下関係を持つというのは、いくら剣道の段位が六段であろうが、七段であろうが、道場を出ても偉そうにして道場の中と同じような行動をとる



と、とても具合が悪いわけです。見方によっては、パワハラなどの問題に発展してしまったりするのです。日本人が来ると、道場の外でも道場の中と同じような態度を取る方が多いので、摩擦の原因になっています。ニュージーランドでは、先生と生徒、先輩と後輩などが、道場を出たら必ず平等にならなければなりません。この点が日本人や韓国人と上手くいかず、喧嘩の原因になるのです。あとはほぼ一緒です。もう1つは、今はどうか分かりませんが、日本文化である剣道をニュージーランドでやっているということで、その社会・文化背景が違うにも関わらず、連盟のルールとして所作や礼儀作法も全部日本のやり方に従い、行っています。なぜ、そういうルールが必要かという、韓国人の道場が増えているからです。仲良くやっているのに全然問題はないのですが、ただ、全国大会や審査になりますと、韓国人の道場でやっている礼法と違いがあるのです。そのため、このような時は必ず日本式に従って行う、そういうポリシーが実はあるのです。ですから日本の剣道は大切にしようとしていますが、何より重要なのは人間関係だと考えており、そういったところに違いがあると思います。

百鬼：剣道そのものではなくて、剣道を指導する人たちの人間性や社会的な背景の問題点が多いということですね。

ベネット：そうですね。もう一つは指導法です。日本でも問題

になっていますが、どこまでが教育でどこからが暴力なのか。日本であったら、大学生や高校生に厳しい稽古をさせることがありますよね。それはお互いに了解の上でやっており、激しい稽古になることもあります。同じことをニュージーランドで行うと問題になることが十分に有り得ます。ニュージーランドのナショナルチームのメンバーを指導する際、皆それをわかっているのですが、一般人に対して同じことを行うと、場合によっては警察に行く可能性もある。指導者としては、怖い部分ではあります。

セイヤー：それは本人ではなく、本人の父親あるいは親戚が警察に行くことが多いと思います。

ベネット：ですから、そういう伝統的で武道的な指導法はニュージーランドにはありません。スポーツはラグビーなど激しいものを色々とするのですが、アンリーズナブルな部分には入らないように注意して指導しています。オーストラリアでも大きな問題になったのです。日本人の指導者が日本でやれ

ば普通ですが、外国で同じことをやったら、本人が警察にまで行かなければならないこともあります。そういうところが、日本とはまた常識が違うというところだと思います。難しいところです。

百鬼：日本の中でも、問題提起されたような内容については、決して良しとはしない、良い指導者とは言えないというような認識で一致していますから、そういう人が指導していることが悪いだけの話だと思います。本来、剣道は人間を作るものであるという意味では、核は変わらないと思います。そのあたりの捉え方について、人間を介した社会における一般論と言えることは、文化というのは時代とともに変容していくことです。そして価値観も世界情勢の中で変わってくるわけです。日本の中でも変わってきています。海外においても、ものの考え方や価値観が違って来る。その価値観に引きずられて剣道そのものが左右されていくということで、今我々が直視できる問題として、柔道がそういった方向に動いているとい



うことが挙げられます。そういった警鐘をわれわれは考えなければなりません。そのような話を韓国の指導者にすると、「日本は日本剣道の国際化ではなくて、世界化を考えている。国際化と世界化は違う」と言います。国際化ということは今のような問題点を内在しており、セイヤー先生がおっしゃるように、相互理解、あるいはそれぞれの国の文化を尊重します、というスタンスがまずあった上で、それぞれの国の民族性、気質に応じた形で広めていくという方向が望ましいのではないかと個人的には思っています。先ほど先生が言われたように、日本人に聞きたいというところはまさにそれなのだと思います。結局そういうところの問題があるから、剣道の本質的な部分、文化性の最も良いところをどう残していくかを考えていかななくてはならない。外圧から色々なものの価値観が変わる中で、きちんと説明をして、お互いの間に立つ橋渡し役となるような人間が、あるいはそれを実践する人間がその方たちとディスカッションしな

がらある程度の方向性を示していくことが重要ではないかと思いません。

榎本（南山大学）：例えば、今、日本で剣道のあるグループがあり、そして剣道を教える先生がいらっしやり、教えるを学ぶ人がいたとします。日本の場合は、剣道の技を伝える師弟関係や昔からの伝統的な相伝の形・教え方があって、かつては教える人が目録や免許を与える権利を持っていました。今、教える人はある程度の資格を持って教えるのですが、教えている生徒たちに「あなたは〇段ですよ」とか、資格を与える権限はないわけです。もし、その先生が生徒に段位を与える資格を持っているとしたら、ニュージーランドで今おっしゃったような問題は起きるのでしょうか。

司会：例えば、落語の師弟関係であれば、生活の主従関係だとか弟子入りして家の中のお世話をすることがありますが、先生のおっしゃったことはそういったことでしょうか。

榎本：私が言いたかったのは、直接教えている指導者、実際に指導現場で生徒と関係を持っている指導者が知っている生徒に対して何らかの資格を与える権限を持っていないということです。もし、そのような関係だったらどうだったのだろうか、ということをお聞きしたいと思います。

ベネット：もともと、ニュージーランドはそういう上下関係は嫌いだと思います。別にそれを問題として見ていないからです。当然道場の外でも一緒です。学校でもその上下があった方が良いというわけではないのです。

セイヤー：ベネット先生の言っていることは、確かにそうです。ニュージーランドはもともとイギリスの植民地だったようなものでした。でも、何が違うかという、そのシステムです。イギリスはMr.を使うなど、はっきりしています。でも、ニュージーランドではそれが無いのです。道場の中で、七段や八段を持っていると、剣道やそのテクニックを教えることができる。しかし、道場の外で、稽古後にバーベキューなどのパーティーがあったときは道場と違う雰囲気を出さないとニュージーランドでは難しいです。道場そのままの雰囲気を外に持っていくと、ニュージーランドでは一般的に堅すぎて合わないと思います。

榎本：われわれの一般的に言うところの師弟関係、かつての相伝の形とか、いわゆる内弟子制度などは絶対に理解されないということですね。



セイヤー：三十数年間剣道をやっていますけれども、初めて剣道をやったときは、さつきベネット先生が言いましたが、少し暴力的な感じでした。

今、私は静岡に住んでいるのですけれども、私の先生が86歳になられます。その先生の話によると、日本では剣道の稽古をする女性・子供が非常に増えました。ですから日本の剣道は変えないといけないということです。剣道の稽古をする皆の意見に対してやらないといけません。海外でも国によって全然違います。ですから差があるのです。でも、日本も昔からだいぶ変わってきているのではないですか？

ベネット：それに関してまた補足ですが、ニュージーランドとオーストラリア、またヨーロッパはわりと歴史が古くないということですね。アメリカは別です。戦前からですから。多くの国が戦後になってから、特に80年代もしくは90年代からです。ニュージーランド



の場合ですと、ニュージーランドの剣道のパイオニアといえばグレアム・セイヤー会長です。ある意味で言えば、先生が1世代目ということになります。グレアム先生が剣道をはじめた動機は今と全然違います。私も違います。最近、どんどん若い人が、特にアジア系の人が増えてきています。また、その剣道をする動機、モチベーションが違います。我々と違うのは、今の若い子が競技としての剣道にとても魅力を感じている点です。試合ですね。しかし、1世代目は、試合はほとんどやっていないのです。剣道の基本、正しいやり方をその国で開発するという大きな責任があつて、おそらくグレアム先生の世代は比較的そんなに試合の経験はないと思います。今の若い人たちというのは、例えば剣道の強い人=試合で勝つ人と考えています。ある意味では当たり前のことかもしれませんが、グレアム先生がおっしゃるようにブリッジをつくるというのは色々な国の人が来てやっている。いろいろな文化的問題が生じますから、その間に入るような人が必要だということ。私は、ある意味で自分のニュージーランドにおける役割は世代のブリッジだと思っています。試合をずっと続けてきている。けれども、骨を折り、汗をかいて、ニュージーランドに正しい剣道を植え付けようとした1世代目の努力もわかっています。今の子達はそれがわからないのだと思います。「この人は打てるから」という態度で来

る子もいます。違うのです。「剣道は試合での勝ち負けも大事だけれども、まだまだあなたがわかっていないことも多いよ」と思うのです。この間もニュージーランドのメンバーの内、何人かはそういう注意をする必要があつたと思います。また、これは決して批判というわけではありませんが、大きな問題として、ニュージーランドでは審判がちゃんとできる高段者が非常に限られています。例えば五段、六段になつても審判がきちんとできるという人がほとんどいません。この点がニュージーランドにおける剣道普及の大きな障害となつていると同時に、上に立つ人たちが下の者に批判される原因でもあるのです。現状の深刻な問題点だと思っています。特に若い子について日本では考えられないような問題が出てきています。師弟関係や、上の者をリスペクトすることはもともとニュージーランドにはないことですが、剣道という文化の中で試合というものをどう位置づけるかということをよく指導しなければならないと思います。上の者が試合を重視してこなかったことで、小さな連盟ですけれども、派閥というべきものが出来つつあります。そこが、私がニュージーランドの監督としてとても気にしているところではあるのですが、これからそのあたりのことをしっかりと押さえておかななくてはならないということでしょうか。

酒井（筑波大学）：面白いお話を有り難うございました。今、試合

の問題というのはすごく大切だと思います。しかし、試合だけに終始してしまうと、あまり面白くないことになってしまいます。日本の場合、剣道を含む武道は競技の中に位置づけられています。しかしまた同時に、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」と最終的な目的は人間形成であると謳っている。私はよくヨーロッパに行き、向こうの指導者と話をするのですけれども、「あなたはヨーロッパまで来て何のために剣道を教えているのか」と聞かれたことがあるそうです。彼が「人間形成だ」と答えたときに「余計なお世話だ」と言われたそうです。向こうではキリスト教を中心とした宗教によって人間形成をしています。「なぜあなたがわざわざ我々の人間形成をするのか」ということでしょうか。では、我々が海外に渡り、現地で彼らと剣道の稽古をする最終的な目的とは何かと考えたときにすぐわからなくなったことがあります。これは十数年前の話ですけれども、そのあたりのことはニュージーランドではどのように考えておられますか。

セイヤー：先生のおっしゃっていることは私も経験したことがあります。ヨーロッパの国の人達といろいろな話をすると、何が大事で、自分の国の剣道には何が必要かと考えます。自分の国のリーダーが関係あるように思います。ニュージーランドの場合は日本のやり方・考え方を踏襲したわけではなく、最初はイギリスの考え方が入って



きたのです。私がニュージーランドに帰ってから変わりました。でも、われわれの剣道に対する考え方が一番変わったのは井上義彦先生がニュージーランドに初めて来られた時です。18年くらい前でした。それから、15年の間に12、3回は来られました。井上先生の考え方は、技術だけではありませんでした。井上先生は剣道の話のベースに仏教の話など、色々な話をしてくださいました。今、井上先生の話聞いたニュージーランドの剣道家が四段、五段、六段になっていますから、ニュージーランド全土に考えが広まっていると思います。ニュージーランドの場合は人間形成が大切ということはどここの道場のトップもわかっていると思います。ですから橋渡し役の人が出てきたら試合の話、伝統的な話、色々な話ができると思いますから、ニュージーランドは心配ないと思います。

司会：それでは、本日はグレアム先生からニュージーランドの剣道事情を詳しくお伝えいただきました。また、各国が抱えている問題点もご提示いただきました。グレアム先生をはじめ、ニュージーランドの方々には剣道を通じ、日本の文化の特性を理解して取り組んでいるということが非常によくわかりました。むしろ、我々が他国の文化や特性を理解しながらその国で広めていくということが重要だということにも気づかされた気が致します。長時間になりましたが、グレアム先生、有り難うございました。

文責：軽米克尊（天理大学）

【The 16thWKC 日本武道学会剣道専門分科会企画】

剣道具を通して日本文化を知る

“Exploring Japanese Culture through Kendo Equipment”

日 時：平成27年5月27日（水） 10:00～12:00
場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟417
総合司会：本多壮太郎（福岡教育大学）
通 訳：アレキサンダー・ベネット（関西大学）
小田佳子（東海学園大学）

- 第1部 DVD「剣道具にみる職人の技と心」上映（1時間）
*文部科学省科学研究費助成事業による研究成果物（酒井，筑波大学）
- 第2部 ワークショップ 「本物の剣道具を感じてみよう」（1時間）
講師：鉄川榮市（東京正武堂・剣道具師）
井上大久・齋藤一貴（アシスタント、同上）



企画趣旨

剣道は、日本が世界に誇る運動文化です。剣道が現在のような形で行えているのは、18世紀にしないと剣道具（防具）が工夫され広く使われるようになったためです。正徳年間（1711～1716）の頃に長沼四郎左衛門国郷らの努力により、いわゆる「しない打ち込み剣術」が始まったわけですが、これを武安義光FIK（国際剣道連

盟）会長は「現代剣道を形成することになるイノベーションの起点」と述べています。そういった意味でも、特に剣道具の存在は、現在の剣道を理解する上で重要です。

剣道具は、甲冑の文化を継承し、刺し、染め、漆の塗り、革のなめし、竹の細工といった高度な工芸技術を駆使したもので、究極まで機能性を追求しつつかつ美しく仕

上げられた日本文化の結晶です。日本人が長い歴史の中で叡智を結集して作り上げてきた本物の剣道具を、剣道をする全ての人が理解しておく必要があると思います。

今回、WKC日本開催を機に、世界中の剣道家に本物の剣道具を知ってもらい、ひいては日本文化を肌で感じてもらいたいと考え本企画を提案するものであります。

Kendo is a physical and cultural activity that has originated in Japan and passed to the world.

Kendo has developed into its current form largely through the widespread adoption of shinai and “bogu,” or armor in the 18th century. During the Shotoku Period (1711-1716), due to the efforts of Naganuma Shirozaemon Kunisato and others, “shinai uchikomi kenjutsu” (shinai striking techniques”) were born. Yoshimitsu Takeyasu, president of the International Kendo Federation, praised this event

as “a monumental innovation that has shaped modern Kendo.” This also underscores the importance of Kendo equipment in understanding modern Kendo.

To produce Kendo equipment, an advanced craftsmanship inherited from armor-making is needed: sewing, dewing, lacquering, tanning leather, working with bamboo; all of these are the manifestations of Japanese culture searching for the highest beauty and functionality. It is important that everyone practicing Kendo understands their equipment

properly, as a product of the knowledge of Japanese people acquired through their long history.

On this occasion, the opening of 16th World Kendo Championship, I would like to propose this project to all Kendo practitioners of the world, to appreciate and further understand the origins and true nature of their Kendo equipment.

第2部ワークショップ「本物の剣道具を感じてみよう」（1時間）

講師：鉄川榮市（東京正武堂・剣道具師）、井上大久・斎藤一貴（アシスタント、同上）

鉄川榮市（東京正武堂）：皆さんおはようございます。長時間にわたりまして映像を見ていただき、誠にありがとうございました。今、映像で流れたものをステージの上に準備させていただいております。どうかご自分の手で触って、どういう材料が使われているかご覧になってください。ご自分が毎日稽古で使われている剣道具の見方、取扱い方が変わってくると思いますので、遠慮なく触っていただき、質問もたくさんいただければと思います。短い時間ですが、お楽しみください。よろしく願いいたします。



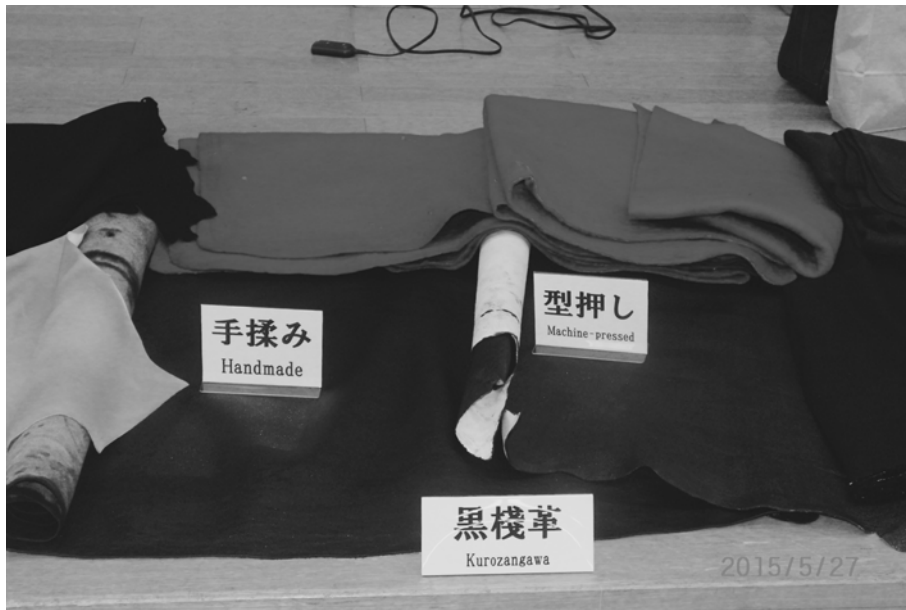
〈剣道具の材料について〉

井上大久（東京正武堂）：まず、剣道具の材料についてご説明いたします。

藍染の紺反（こんたん）は、藍染をすることにより、布が丈夫になり、抗菌効果もありますので、剣道具に適しています。



胴の胸に使う革は黒棧革（くろざんがわ）と言いまして、手で揉みだした手揉みの黒棧革と、革に漆をのせてしっかりと機械でプレスした型押しMachine-pressedの黒棧革があります。



小手・面などには鹿革を用品。鹿革にも2種類あります。1つは中唐（ちゅうとう）という養殖の大きな鹿、もう1つは小唐（ことう）という天然の小さな鹿です。小唐の方が丈夫です。ぜひ触ってみてください。なぜ鹿の革が使われているかと言いますと、汗に強いということもありますが、乾きやすいということもあります。鹿革はタバコの煙をも通します。



小手の頭の中には鹿毛が入っています。なぜ鹿の毛かというと、鹿の毛は中が空洞になっているため、軽いからです。

鉄川：鹿毛の下の半分だけ使います。

井上：使っていくうちに、毛が小手の中で切れて、使っている人の手の形になっていきます。



〈剣道具の制作工程について〉

井上：続きまして工程の方に移りたいと思います。

小手の布団は、何も描いていない状態から、筋引きをして、線を引いた状態になります。こちらは後で出来ますので、よろしければ体験してみてください。次に綿を入れ、仕込んだ状態にします。そして、仕込んだものを針で刺していきます。最後に、刺したものを締めていきます。こうして、本当に丈夫な、打たれても痛くない、肌になじむ使いやすい布団になっていきます。



後で触っていただきたいのですが、面の縁には生革（きがわ）という牛の革が使われております。同じように顎の部分にも生革が使われております。生革は作る時には水につけて柔らかくします。乾燥すると硬くなります。硬くなるまでに仕立て上げて、乾燥させると、面を打たれても大丈夫なくらい硬くなります。

次に面金です。主に使われているのはチタンとジュラルミンです。ジュラルミンの方が軽くて安いのですが、チタンの方が丈夫です。衝撃吸収性に優れています。

面の内部の内輪については、フリーハンドで刺していきます。



胴台はこの状態から漆を塗っていきます。



〈剣道具の展示について〉

井上：また、現在の剣道具に至るまでの変遷過程がわかるように、1880年代頃にできたものから剣道具を並べましたので、見ていただければと思います。形もほとんど変わっていないのですが、その中で少しずつ進化してきていると思います。なかなかお目にかかれなと思いますので、ぜひともご覧になってください。



井上：せっかく来ていただきましたので、これからお国に帰られたとき、修理等で困ることが多いかと思
います。穴の補修など、簡単な修理の仕方については、今日、一緒に出来ればと思いますので、興味のある
方はお声掛けいただければと思います。筋引き、刺し、修理を三人で行いますので、それぞれ興味のある
ところへ行っただき、ご質問いただければと思います。 文責：軽米克尊（天理大学）



〈映像配信のお知らせ〉

剣道専門分科会のホームページにおいて、本特別企画の第2部 ワークショップ「本物の剣道具を感じてみよう」の映像配信を行っています。映像は〈材料と工程の説明〉と〈体験講座〉の2つに分けられて配信されています。どうぞご覧ください。

剣道専門分科会ホームページ「KENDO ARCHIVES」
<http://www.budo.ac/kendo/>



剣道具 豆知識

藍染め あいぞめ Aizome

木綿全般あるいは紺革に施されている技法です。藍（あい）で染めることにより、木綿は擦れに強く丈夫になります。肌にも優しく防虫・抗菌効果があります。

Indigo dyeing

This process is applied to dye both cotton and leather. Dyed cotton becomes stronger and more resilient to wear and tear, and the dye makes leather mothproof and gives it an antibacterial effect.

鹿毛 しかげ Shikage

甲手の頭（拳）の中の部分に使用されている素材です。鹿の毛はストロー状（中空）になっているため軽く、通気性がとてもよい素材です。使用していくうちに切れて、使用者の手に馴染んでいきます。

Deer fur

This material is used inside of *kote*. Deer fur is a soft material with good ventilation. Each strand of hair is hollow which makes it light, and it is an ideal material for use as stuffing inside *kote*. It molds to the shape of the user's hand through kendo practice, and becomes even more comfortable to use.

鹿革 しかがわ Shikagawa

白革・茶革・紺革があり、それぞれに小唐（ことう）と中唐（ちゅうとう）という種類があります。小唐とは、天然の鹿から取れた素材で、養殖の鹿から取った中唐よりきめが細かく高級とされています。面、甲手、垂、胴の胸に使用されています。鹿の革は、無数の穴が空いていて通気性がよく、乾きやすい素材です。また、鞣（なめ）すことによりしなやかな柔軟性をもち、燻（いぶ）すことで頑丈になります。

Deerskin

There are three kinds: white, brown and blue, each with the two versions of *kotō* and *chūtō*. *Kotō* is from wild deer, more delicate in texture, and considered to be of higher value than the hide of domesticated deer. It is used for the *men*, *kote*, *tare*, and on the breast part of the *dō*. Deerskin has many tiny holes making ventilation very good. Moreover, it dries quickly, becomes more flexible when tanned, and stronger when it is cured with smoke.

生革 きがわ Kigawa

面縁、顎縁（あごぶち）、胴に使用されている素材で、水に浸けると柔らかくなり、乾くと硬く丈夫になるという性質から、剣道具製作に適しています。

Rawhide

This material is used for the edges of the *men*, the chin-plate and the breastplate. It becomes flexible when it is moist and harder when it is dry, making it an ideal material for kendo equipment.

黒棧革 くろざんがわ Kurozangawa

黒色の棧留皮（さんとめがわ）という鞣（なめ）した革のことで、手揉みで作ったものと型押ししたものがあります。胴の胸や、面の耳革に使用されます。牛革を加工することにより堅牢さと柔軟性を兼ね備えた素材で、見た目にも非常に美しいところに特徴があります。

Kurozan leather

This is the black version of the tanned leather called Santome leather. It can be either handmade or machine-pressed. It is used on the breastplate on the *dō*, and the parts of the *men* covering both sides of the lower jaw area such as the *mimikawa*. Made of processed cowhide, it is both solid and flexible at the same time. It also has a beautiful sheen.

鉄川榮市・井上大久・齋藤一貴（東京正武堂）

Produced by Eiichi Tetsukawa
Hirohisa Inoue, Kazuki Saito (Tokyo Shobudo)

平成26年度 剣道専門分科会 事業報告（案）

1) 総会の開催

平成26年9月11日（木）、福山市立大学港町キャンパス研究棟1階「中講義室A」において、平成25年度事業報告および平成25年度決算、平成26年度事業計画および平成26年度予算を審議し、承認した。

2) 日本武道学会第47回大会における分科会企画講演会の開催

下記の内容で講演会を開催した。

テーマ： 「脳を活性化する剣道」

日時： 平成26年9月11日（木）14：00～15：30

場所： 福山市立大学 港町キャンパス研究棟1階「中講義室A」

講師： 医学博士 日本外科学会専門医 中四国学生剣道連盟会長
剣道範士八段 湯村 正仁 先生

司会： 坂東隆男幹事（大阪大学）

3) 研究会の開催

下記の内容で研究会を開催した。

日時：平成27年3月14日（土）15：00～17：00

場所： 講道館2階 教室

講師： グレアム・セイヤー(Graham Sayer) （ニュージーランド剣道連盟会長）

演題： 「外国人剣道家が捉える剣道の競技としての特性と日本文化としての特性」

4) 幹事会の開催（3回）

下記の日時・場所で、幹事会を3回開催した。

平成26年 4月26日(工学院大学)

5月31日(講道館)

10月25日(講道館)

※原則として、年4回全国理事会時にあわせて開催しているが、27年3月14日理事会の折は研究会開催のため、分科会幹事会は見合わせた。

5) 会報『ESPRIT 2013』・『ESPRIT 2014』の発行

会報『ESPRIT 2013』を、平成26年9月30日付で発行した。

会報『ESPRIT 2014』を、平成27年3月24日付で発行した。

6) ホームページ「KENDO ARCHIVES」の運営

ホームページ「KENDO ARCHIVES」 (<http://www.budo.ac/kendo/>) を運営した。

7) 会費の徴収

平成26年度会費2,000円を徴収した。

8) 会員数

平成27年3月31日現在で、会員数は127名（うち名誉会員8名）となった。

以上

平成27年度事業計画（案）

1) 総会の開催

下記の日時・場所において総会を開催する。

日 時： 平成27年9月10日（木）

場 所： 日本体育大学 世田谷キャンパス

議 題： 平成26年度事業報告および平成26年度決算、
平成27年度事業計画および平成27年度予算ほか

2) 日本武道学会第48回大会における分科会企画講演会の開催

下記の内容で、講演会を開催する。

テーマ： 剣道とマスメディア —テレビ放送からみた剣道—

講 師： 太田雅英氏（NHK大阪放送局 アナウンサー）

司 会： 長尾進（明治大学）、大石純子（筑波大学）

日 時： 平成27年9月10日（木）

場 所： 日本体育大学 世田谷キャンパス

3) 研究会の開催

平成28年1～3月の間に開催する。

4) 第16回世界剣道選手権大会における剣道専門分科会企画の開催

日 時：平成27年5月27日（水） 10:00～12:00

場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター

テーマ：剣道具を通して日本文化を知る

第1部 DVD「剣道具にみる職人の技と心」上映（1時間）

*文部科学省科学研究費助成事業による研究成果物（酒井，筑波大学）

第2部 ワークショップ「本物の剣道具を感じてみよう」（1時間）

講 師 鉄川榮市（東京正武堂・剣道具師）

アシスタント 井上大久・齋藤一貴（同上）

5) 幹事会の開催

原則として、本部理事会開催日に幹事会を行う。

（6月、7月、11月、3月）

6) 広報活動の活性化

- ・剣道に関する学術情報の英訳をし、発信する。
- ・他学会及び海外研究機関との交流を活性化する。

7) 会報『ESPRIT 2015』の発行

会報『ESPRIT 2015』を発行する（9月発行予定）。

8) ホームページ「KENDO ARCHIVES」の運営

ホームページ「KENDO ARCHIVES」（<http://www.budo.ac/kendo/>）を運営する。

9) 会費の徴収

平成27年度会費2,000円を徴収する。

以上

平成26年度 剣道専門分科会 一般会計決算書(案) (平成26年4月1日～平成27年3月31日)

1.収入の部

科目	予算額	決算額	差異	摘要
1 前年度繰越金	151,376	151,376	0	平成25年度からの繰越金
2 会員会費	220,000	254,000	△ 34,000	会費2,000円×127口(26年度分82口、過年度分45口)
3 本部助成金	50,000	80,000	△ 30,000	学会本部より助成金(分科会への定額補助50,000円+テーブル起こし代30,000円)
4 広告収入	48,000	0	48,000	ホームページ、バナー広告 2,000円/月
5 寄付金収入	0	6,088	△ 6,088	雑収入
6 特別会計より組み入れ	0	0	0	
7 利息	0	21	△ 21	分科会口座預金利息(4月1日:6円、10月1日:15円)
8その他	0	0	0	
当期収入合計	469,376	491,485	△ 22,109	

(単位/円)

2.支出の部

科目	予算額	決算額	差異	摘要
1 研究助成費	150,000	150,000	0	講師謝礼:47回大会分科会企画(80,000円)、研究会(30,000円)、テーブル起こし(20,000円)、英訳手数料(20,000円)
2 広報活動費	10,000	0	10,000	
3 印刷・消耗品費	80,000	64,373	15,627	ESPRIT2013印刷代・事務用品等
4 通信費	50,000	20,423	29,577	郵送料、切手・はがき代等
5 会議費	20,000	21,400	△ 1,400	幹事会等会議費
6 交通費	100,000	32,000	68,000	幹事会等交通費
7 傭人費	50,000	34,000	16,000	事務局および広報活動におけるアルバイト
8 予備費	9,376	51,702	△ 42,326	ESPRIT2014印刷代
9 次年度繰越金	0	117,587	△ 117,587	平成27年度への繰越金
当期支出合計	469,376	491,485	△ 22,109	

(単位/円)

監査の結果、適正であることを証明いたします。

平成27年 6月27日

日本武道学会剣道専門分科会監事

八木沢 誠
 軽米 克尊



平成27年度 剣道専門分科会 一般会計予算書(案) (平成27年4月1日～平成28年3月31日)

1.収入の部

科 目	予算額	前年度予算額	差異	摘 要
1. 前年度繰越金	117,587	151,376	△ 33,789	平成26年度からの繰越金
2. 特別会計より組み入れ	0	0	0	
3. 会員会費	220,000	220,000	0	2,000円×110口
4. 本部助成金	50,000	50,000	0	学会本部より助成金
5. 広告収入	48,000	48,000	0	ホームページ、パナー広告 2,000円/月 26年分 27年度分
当期収入合計	435,587	469,376	△ 33,789	

(単位/円)

2.支出の部

科 目	予算額	前年度予算額	差異	摘 要
1. 研究助成費	150,000	150,000	0	第48回大会分科会企画、及び研究会の助成金
2. 広報活動費	10,000	10,000	0	恒常的広報活動への助成
3. 印刷・消耗品費	80,000	80,000	0	会報印刷代、事務用品等
4. 通信費	40,000	50,000	△ 10,000	郵送料、切手・はがき代等
5. 会議費	20,000	20,000	0	幹事会等会議費
6. 交通費	80,000	100,000	△ 20,000	幹事会等交通費
7. 備人費	50,000	50,000	0	事務局および広報活動におけるアルバイト
8. 予備費	5,587	9,376	△ 3,789	
当期支出合計	435,587	469,376	△ 33,789	

(単位/円)

事務局だより

本年5月に世界剣道選手権大会が日本で開催されましたことは、剣道界にとって大きな出来事でありました。更にこれに際し、本分科会において「剣道を通して日本文化を知る」をテーマとした企画を成功裡に執り行うことができましたことは、我われにとって大きな意味のあることであつたと思います。企画の内容について、本誌に掲載させていただきました。事務局としましては、これを起点として今後も分科会の活動を世界に発信していくお手伝いをさせていただければと思っております。

また、本誌におきましては、ESPRITでしか目にするのできない特集記事を掲載していきたいと考えています。会員の皆さんが面白いと思われる企画のアイデアを、事務局までお寄せいただければ幸いです。

今後も若手とベテランが一体となって生き生きと活動していける雰囲気作りをしていきたいと考えております。ご指導ご協力いただけます様、お願い致します。

事務局長
酒井 利信 (筑波大学)

剣道専門分科会会報 編集委員

大保木 輝雄
長尾 進
数馬 広二
酒井 利信
齋藤 実 (デザイン)



日本武道学会剣道専門分科会事務局

〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学体育系 酒井利信研究室気付

E-Mail: sakai@taiiku.tsukuba.ac.jp